

アフリカの子ども達に 智頭のお米を

百人委員会の教育・文化部会、コントリビュション（貢献）の会では昨年より坂原の休耕田を利用してお米を育てています。昨年収穫した600kgのうち300kgはケニアの孤児院「マトマイニ・チルドレンズ・ホーム」へ贈りました。

9月17日（土）この日はあいにくの小雨でしたが約50人が参加。坂原の人達に鎌の使い方を習いながら、小学生と鳥取大学の留学生が黄金色に実った稲を刈り取りました。今年も600kgのお米を収穫し、ケニアに送る予定です。

現在、世界中には1日1ドルでしか生活の出来ない人が10億人以上いると言われています。その中で、日本は良いお米を作れる田んぼが沢山あるのに、減反しているという矛盾ともとれる事を行っています。この会では休耕田を活かし、国際貢献活動と子ども達の情操教育を行っています。ただ単にお米を作って贈るというのではなく、現地の状況を学び、自分たちの作ったお米がどのように活かされているかを学習します。また、近年では稲を手刈りすることが少なく、子ども達にとっては貴重な農業体験にもなっています。地元の人や留学生と交流することで、地域性を高めると同時に広い視野を身につけることが出来ると考えています。

コントリビュションの会では来年以降もこの活動を継続します。皆さんも一緒に活動しませんか？

教育委員会

☎75-3114



初めての稲刈りに夢中の留学生達



藁で束ねるのが難しい？



マトマイニの現状をみんなで学ぶ



稲刈りの参加者



マトマイニ・チルドレンズ・ホーム

～お礼の手紙～ 智頭町の皆さまへ

先週、ケニア JICA 事務所の手配で智頭のお米がマトマイニに届きました。智頭のピッカピカのお米を炊けば、育ち盛りの子どもがたくさんいますので「タムサーナ！（おいしい）」と言ってすぐになくなってしまいそうです。そこで、ケニアの米も混ぜながら、少しずつポレポレ（ゆっくり）と使うことにします。皆さまの汗と愛情とアフリカへの思いが一粒一粒に詰まっているお米を大切にに使わせていただきます。

感謝でいっぱいのお米が届きました。本当にありがとうございました。

マトマイニ・チルドレンズ・ホーム
院長 菊本 照子

東日本大震災からの復興へ

被災地でのボランティア活動に参加して



本折児童館
山内崇裕（23）

「少しでも復興へのお手伝いがしたい」

安易な理由かもしれないが、いてもたってもいられなかったのだ。そう思い立って6月23日、夜行バスと新幹線乗り継ぎ宮城県へ急いだ。

● 巨理町へ

目指したのは海沿いに位置する巨理町。イチゴで有名な町だが、大津波により町の約半分が浸水し甚大な被害を受けていた。

24日朝、巨理町ボランティアセンターで受付を済ませた。職員がボランティアの依頼内容を発表し、それぞれが希望する仕事に挙手。僕は海沿いの荒浜地区の家で泥のかき出し・瓦礫撤去の作業に参加することに。10人ほどのメンバーで簡単なミーティングを行い、道具を車に詰め込み出発。



● 絶句

車窓からの光景を見て絶句した。漁船は道路に乗り上げ、電柱は倒れたまま。海水が引いていない所もあった。海辺の方に目を向けると、家が丸ごと海に沈んでいる。海の上の橋には車が宙づり状態。建物の基礎部分しか残っていない民家。日常生活を奪っていった震災被害の現実を突き付けられた。



● 現地での活動

現地に到着するころさっそく役割と担当場所を決め、作業にあたる。蒸し暑い中、みな黙々と泥をかき出しては運び、かき出しては運びを繰り返す。泥は海水を含み重く、ガラスの破片は散乱し、庭に植えられた植物は枯れ、海の生物の死骸も見られた。泥の中からは、様々なものが出てくる。CD、洋服、手紙、食品…これも家の中にあつたものだ。泥が混じり、ボロボロになっているが、それらは家主にとっては大切なものばかり。まだ使えそうなものは、出来る限り泥を拭き取り、返せるように



泥のかき出し作業は想像以上にきつい作業。全身に疲労がたまる。僕は床下の泥かき担当だったので常に中腰状態。汗が滝のように流れた。何度も手が止まる。そんな中、あるボランティアの一言。「奥さん（家主）の笑顔が見たいよね」

その言葉を聞いたとき、急に作業のスピードが上がった気がした。「笑顔が見たい」その時はそれしか考えていなかった。そこで作業していた人みんながそんな気持ちだっただろう。気がつけば作業終了時間までに、庭の泥のほとんどをかき出していた。

● 活動に参加して

作業終了を報告すると、奥さんは涙を流しながら、「本当にありがとうございました。気持ちになりました」と喜んでおられた。胸が熱くなった。そのとき感じた想いは言葉では言い表せない。逆に勇気づけられた気がした。そしてそこにいた誰もが笑顔だった。その時差し入れていただいたジューズの味は、今でも忘れられない。

いろいろなことを考えさせられたが、強く感じたのは、「人の強さ」だ。巨大な地震・津波の前に人は為す術もなかった。多くの尊い命も失われた。しかし被災地の人々は闘い続けている。懸命に生きている。少しずつではあるが、確実に前進している。ひとつでも多くの笑顔が見たい、少しでも力になりたい、その気持ちがあれば人は結束し、頑張ることができる。そして必ず震災から復興できると信じている。まだまだ多くのボランティア・助けが必要だ。こういった思いは自然と連鎖するのだろうか。僕の弟も自ら現地へと向かった。